

箱庭における主観的体験の研究

－ 被受容感に焦点を当てて －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
今西 彩

本研究の目的は（1）被受容感に関する制作者の主観的体験とその変化について検討を行うこと。（2）被受容感・箱庭の置かれた場の安心感と箱庭における他の体験との関連を分析すること。（3）見守り手、箱庭の世界、箱庭を制作した部屋に関する制作者の主観的体験と、その体験が及ぼした箱庭制作への影響の考察を行うこと。（4）さらに、それらの協力者の主観的体験の変化と、その理由について検討することであった。

対象者は大学生7名であり、計5回の箱庭制作を行っている。箱庭における主観的体験についての質問紙に回答してもらった後、半構造化面接を行った。

その結果、被受容感を感じる対象は見守り手、箱庭の世界、箱庭の構造の3つに大別されることが示された。被受容感は箱庭制作における満足度、非日常感と正の相関があり、感情面や箱庭制作に肯定的な影響を及ぼすことが示された。また、自由度、新しい自分への気付き、没頭度とは弱い正の相関があり、箱庭の世界に制作者が没頭し、箱庭が展開していく上で被受容感は大きな役割を果たすことが示された。

見守り手の体験に関しては、見守り手への意識とその意義が語られた。意識は後半になると低下し、反対に見守り手の意義は高まった。見守り手の存在は、時に緊張や不安を引き起こし、自己表現の抑止力となる。また、箱庭の世界を共有できることが、新しい自分への気付きや安心感をもたらすことが明らかになった。

箱庭の世界の体験は、個人差が大きいものの初回の穏やかな体験は、展開期となる4回で違和感や不可解さに変わり、最終回では、深い自己洞察の上で成り立つ、被受容感の体験という過程を辿る傾向が強いことが明らかになった。また、外的な世界とつながる通路としての役目を果たしていることが考察された。

箱庭を制作した部屋の体験としては、物理的な機能と心理的な機能が語られた。また、見守り手や箱庭の世界との関連が語られたことから、場はそこにあるものに強く影響を受けることが考察された。場の安心感は回を重ねるごとに上昇し、さらに心理的な機能が強調されるようになった。箱庭を制作した部屋に、制作者自身が意味を付加するという積極的な働きかけがあったと考えられる。部屋の安心感は、没頭度、頭で考えずに制作を行うこと、別世界感と相関があり、箱庭の世界に入り込み、自由に世界を創造するために、場の安心感は重要な役割を果たすことが明らかになった。さらに、場の安心感は制作者の正の感情を高めることが明らかになった。

これらの結果から、箱庭制作過程で見守り手、箱庭の世界、箱庭の置かれた場は制作者に重要な意味を持ち、制作者を受け容れる容器として機能したことが考察された。